

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第630号 平成25年10月22日

## はだしのゲン騒動（2）

「船橋市立西図書館事件」というのは、2001年に起こった事件で、船橋市の西図書館の女性司書が、西部邁氏や新しい歴史教科書をつくる会会員らの著書計107冊を、自らの政治思想に基づき除籍・廃棄したというものです。自分の気に食わない図書を廃棄してしまうという事こそ、まさに市民から知る権利を奪う暴挙といえるべきですが、こうした事件と今回の「閲覧制限」をあたかも同じもののように批判するのは如何かと思います。

ただ、そうはいつでも、閉架式になってしまうと、それでも読みたいという積極的な生徒が出て来るとは余り考えられませんので、閉架された書籍は生徒から遠い存在になってしまうという事は避けられないと思います。ですから、開架式だったものを閉架式にするというのであれば、説明責任が問われるのは当然といえるでしょう。

「はだしのゲン」という作品に対しては、「戦争の悲惨さを良く伝えている」と評価する声がある一方で、過激で残酷な表現がある、内容が反日的で変更しているといった批判的な意見も少なくありません。

私は、随分昔に「はだしのゲン」を読んだ記憶がありますが、残念ながら内容は覚えていませんでした。それで、今回の騒動を機に改めて「はだしのゲン」10冊を買い求め読んでみました。

確かに、過激な場面や残酷な場面があり、「子どもへの配慮が必要」という市教育委員会の判断も、その全てが誤りだとは思いません。ただ、戦争の悲惨さは、しっかりと語り継がなければ風化してしまう事は避けられません。その意味で、「はだしのゲン」が持つ意味は非常に大きいと思います。

松江市に提出された陳情書では、「はだしのゲン」は「ありもしない日本軍の蛮行が描かれており、子どもたちに間違った歴史認識を植え付ける」として、学校からの撤去を求めています。

指摘に有る様に、作品中の表現には事実誤認に基づくものや、事実が誇張されているものがあるかも知れません。仮にそうだとした場合、それは図書館からこの作品を撤去しなければならない程のものだとは思いません。何故なら、「はだしのゲン」は、作家の中沢氏が6歳の時に広島で原子爆弾の被害を受け、父と姉、弟を失うといった自身の悲惨な体験を基にして書かれたものであり、子どもの目を通して見、

体験した戦争の残酷さを余すところなく表現しているからであり、それ故に、この作品は高い評価を得ているのだと思うからです。

この作品には、戦争を呪い、反戦争、反原発という思想が明確に表現されています。しかし、この作品の一番大事なテーマは、酷薄な現実の中で逞しく生きて行く少年を描いているところに有る筈です。そこを見ずに、この作品を全否定する様な事は許されるべきではないと思います。

中沢氏の妻ミサヨさんは「はだしのゲン」について、こう述べています。

「ゲンの一番のテーマは、踏まれても踏まれても真直ぐに伸びていく『麦』です。そんな成長物語の背景に戦争と原爆がある。たたかれたり、いじめられたりしても、精いっぱい生きていけばいいことがあるという主人がゲンに託したメッセージは、今の子どもたちの心に響くものがあると信じています（8月27日付朝日新聞から）。」

さて、問題の「閲覧制限」に関してどうなったかということ、皆さんもご承知のように、8月26日に開催された市の教育委員会において次のように決定しています。

昨年12月に行った小中学校への「閲覧制限」に関する要請は、当時の教育長と事務方の判断で決めた事である。この要請については手続きに不備があり、昨年12月の要請前の状態に戻すことが妥当である（8月27日付北海道新聞他から）。

つまり、単に手続きに不備があったので元に戻すという事ですから、「閲覧制限」の是非という本質的な問題については、宿題として残ったままです。

また、教育委員会の一連の顛末で最も問題なのは、「はだしのゲン」を撤去すべしという市民からの要望（外圧）を受ける形で「閲覧制限」をし、それに対してマスコミ等から厳しい批判（外圧）を受けると、大した議論もせず撤回する、こうした教育委員会の外圧に対する主体性のなさこそ問題の根本であり、教育委員会制度に対する存在意義が問われる事にもなりかねません。私はこの事に、強い危機感を覚えます。（塾頭：吉田 洋一）